

# 六甲山ハイカー救助最多

## コロナ禍で人気、道に迷い転落も

神戸、阪神間の六甲山系で山岳救助事案が増えている。9月末時点で、神戸市内では過去25年で最多となっており、芦屋、西宮両市内でも前年同期の倍に。近年の登山ブームに加え、要因として専門家は「新型コロナウイルスの感染リスクの低さから登山が注目され、都市部に近い六甲山の人気が増した」と分析する。紅葉が本格化する行楽シーズンを前に、各消防は「日没も早まる。準備して入山を」と注意を呼び掛ける。

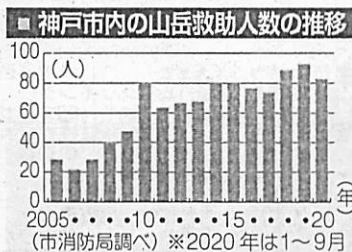
神戸市消防局によると、市内で1〜9月に救助したのは83人。1995年以降で年間の救助人数が83人より多かったのは、2018年(89人)と19年(93人)だけ。9月末時点で

奇岩群で人気の「芦屋口ツクガーデン」を抱える芦屋市内では1〜9月で11人(前年同期5人)。同市消防本部は、阪急芦屋川駅から徒歩で入山できるのが魅力とした上で「軽装備の方

は18人が67人、19年は61人で、今年が大きく上回る。登山者が道に迷ったり、山道から転落・転倒したりして助けを求めると、ケガが半数以上を占めており、同消防局は「地図やコンパスを持たない準備不足の人が多い」と困惑する。

一方、管内に雪彦山がある姫路市消防局や兵庫県最高峰の水ノ山などを管轄する南但消防本部(朝来市)では、山岳救助件数は例年並みという。

「コロナ禍で遠出を控えた人が、交通の便が良くて安心感がある六甲山に集まっているのでは」と指摘するのは、県山岳連盟副会長で神戸登山研修所(神戸市灘区)所長の黒田信男さん(74)。平日でも登山客が増



## 神戸市消防準備不足に警鐘

### 安全な登山のためのポイント

- (神戸市消防局と黒田信男さんへの取材に基づく)  
(当日までに)
- ▲日没までに帰れるようコースや時間管理を計画。単独行は避ける
  - ▲普段からウォーキングなどで基礎体力を付け、最低限の登山技術も学ぶ(服装・持ち物)
  - ▲長袖や長ズボン、帽子を着用。天気急変に備え雨具や防寒具も
  - ▲足が冷えないようトレッキングシューズ着用。なければ履き慣れた運動靴
  - ▲山歩き用の地図とコンパス、水、非常食、ヘッドライトなど
  - ▲道に迷ったら
  - ▲分岐点に戻る。むやみに谷筋を下りない
  - ▲六甲山系の山中に立つ道標「119ばんつうほうプレート」を確認して119番
  - ▲救助を待つ間はできるだけ動かさず体力を温存する

### クワムラハム

加したといい、「目的地も決めずに安易に山に入る人もいる。スマートフォンだけでは不十分。今は専門店も増え、登山道具も手に入りやすいため、最低限の準備を」と警鐘を鳴らす。

万一の遭難に備え、「行き先を家族に伝えたり、登山口のポストに入山カードを投函したりして、救助してもらいやすくなることも大事な視点だ」と訴える。

11月6日金曜日神戸新聞分

すべてコロナ禍のせいにはできない。きっかけはそうであつたよと思う。ただ、過信をして準備不足・段階を踏まないことばかり他人への迷惑をどう感じているのだろう。